

様式 1

研究報告書（平成 25 年度）

提出者 増田 知之

提出年月日 平成 26 年 3 月 31 日

**【本ユニットにおける研究テーマ】**

和文 アジア学に関する国内データベース調査、中国書法史研究

英文 The Research of Databases about Asian Studies in Japan, The Study of Chinese Calligraphy

**【研究のねらいと目的】**（600 字程度）

1. アジア学に関する国内データベース調査

現在、日本の各種機関において多種多様なデータベースが提供されているが、それらを統合・整理する試みは、管見の限りいまだなされていない。そこで、日本の研究者のみならず、海外の研究者の便に供するために、本ユニットの研究活動として「アジア学」に関するデータベースの調査に取りかかることにした。本年度はまず、全体を統合するデータベースを作成する前段階として、そのメタデータを集積すべく、本学や東京大学など日本国内の代表的機関において作成・管理されている各種電子リソースの実態把握を目指した。

2. 中国書法史研究—内藤湖南の書法史研究を中心に—

提出者がこれまで続けてきた中国書法史研究に関して、本年度は内藤湖南の「唐宋変革論」を取り上げて、書における唐宋変革について再検討を試みた。湖南は政治・経済・社会・文化などあらゆる面において唐宋間に断層が存すると主張しているが、書に関しては明確な指摘を行っていない。そこで、湖南の学説とそれを受け継いだ神田喜一郎ら京都学派の後学による諸研究を比較して、書における唐宋間の差異、宋代書文化の革新性、また形骸化した伝統書法の改革者とされる顔真卿に対する評価等の諸点について検討を加えた。

**【研究業績】** 学会報告・論文など

[論文]

・増田知之「内藤湖南の顔真卿理解について—「書」における「唐宋変革論」のためのメモ—」、『書論』第 39 号、平成 25 年

[招待講演]

・増田知之「我对明清時代書法の研究」（中国語）、杭州師範大学美術学院主催「近代中日書法交流史概観」講演会、於：杭州師範大学美術学院、2013（平成 25）年 10 月

**【成果の概要】**（800 字程度）

1. アジア学に関する国内データベース調査の成果

本年度は、本学（人文科学研究所・附属図書館など）、東京大学（東洋文化研究所・史料編纂所など）、国際日本文化研究センター、国立国会図書館、東洋文庫、国立文化財機構（東京国立博物館、京都国立博物館）等の諸機関が作成・管理する、日本・中国を中心とした「アジア学」に関連するデータベースの実態調査を行った。各データベースの調査に際して、(1)データベース名、(2)URL、(3)作成・管理機関名、(4)簡単な解説、(5)公開状況、の五項目の情報を収集し、逐次データ化していった。また、本年度は時間的制約もあって、約 200 件のデータベースを調査するにとどまった（尚、本年度の成果として調査結果をまとめたデータを添付する）。

2. 中国書法史研究の成果

・学術論文「内藤湖南の顔真卿理解について―「書」における「唐宋変革論」のためのメモ―」の概要

現在すでに定論となっている内藤湖南による「唐宋変革論」と「書」文化の発展との関連性を解明すべく、湖南の顔真卿に対する評価について検討を加えた。北宋の蘇軾・黄庭堅以降、わが神田喜一郎に至るまで、顔真卿は初唐以来の形骸化した伝統書法（王羲之書法）を変革した立役者として捉えられてきたが、一方で湖南は、顔書に対し極めて辛辣な評価を与え、その革新性を書法史上に肯定的に位置づけていない。更にいえば、湖南は唐から宋への「書」文化の発展に、自身が編み出した「唐宋変革論」的変容を認めていないのである。

・招待講演「我対明清時代書法的研究」の概要

平成 25 年 10 月に杭州師範大学美術学院で開催された講演会において、明代書法史における当時数多く刊行された法帖が果たした役割、清代書法史における法帖刊行を中心とする満洲族皇帝の文化政策の実態などについて、自身のそれまでの中国書法史に関する研究過程を振り返りながら、同大学の教員・学生に向けて講演を行った。

**【通信欄】**

平成 26 年 4 月より安田女子大学文学部書道学科に勤務することになりました。今まで貴重な研究の場を与えていただきまして、誠にありがとうございました。